

認知症者の在宅生活を維持する非訪問型の生活評価・介入システムの標準化に関する研究

研究分担者：松原 茂樹 （国立大学法人大阪大学・大学院工学研究科・准教授）

研究要旨：認知症者が在宅生活を継続できるよう、作業療法士等が訪問せずに写真を使って簡単に生活状況を評価し、生活の維持・改善に向けた介入ができるシステムを開発する。生活評価・介入の実施を踏まえ、必要な情報が適切に撮影できているか評価した。

A. 研究目的

認知症専門医と作業療法士などの多職種が協働して、感染症まん延下においても認知症者の認知症疾患別また重症度別に適切な在宅支援が可能となる非訪問型の生活評価・介入システムを構築するために、建築計画分野から住環境評価の指標を作成することを目的とする。

B. 研究方法

非訪問型の住環境評価の指標を作成するためにキャプション評価を援用し、評価シートを作成する。キャプション評価とは元来、都市景観評価のために1995年に開発された手法である。気になる箇所をカメラで撮影し、それについてのコメントを決まった書式に従って記述し、写真とコメントのセットで1枚のカードにして評価する手法である。各研究分担者による生活評価・介入の実施によって得られた撮影した写真・キャプション評価の特徴・課題を明らかにする。

なお、大阪大学医学部附属病院倫理委員会（承認番号（22552(T5)-2））より承認を受けている。

C. 研究結果

住宅の規模・種類によって評価・介入の差が見られた。具体的には、住宅の規模が大

きい住宅や戸建て住宅では撮影対象と撮影者との距離が確保できるので、評価・介入のしやすさに影響が少なかった。一方で住宅の規模が小さい住宅や集合住宅では、撮影対象と撮影者との距離を確保することが難しくなるが、評価・介入のしやすさに大きな影響を与えなかった。

D. 考察

撮影条件による評価・介入は職員の経験が影響を及ぼす可能性が考えられるが、今後カメラの性能が向上することにともない、職員の経験の影響は減少すると考えられる。

E. 結論

写真・キャプション評価を用いた生活評価・介入システムの有効性が得られた。

G. 研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表
なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む。）

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録

厚生労働科学研究費補助金（認知症政策研究事業）
分担研究報告書

なし

3.その他

なし